



Title	附録 贅菴先生遺稿
Author(s)	吉田, 鋭雄
Citation	懷徳. 1941, 19, p. 1-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89082
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

聶菴先生遺稿

登菴先生遺稿に就て

中井登菴先生（名は誠之、サネユキ字は叔貴、寶曆八年歿す享年六十六）の著述は、懷德堂遺編目錄等の十一種が挙げられて居る。

不問語一卷 已刊

五孝子傳一卷 已刊

富貴村良農事狀一卷 已刊

喪祭私說一卷 未刊

春のことば一卷 未刊

息游先生事狀一卷 未刊

登菴雜記

登菴詩文集

登菴和文集一卷

貽範先生遺集三卷

新題和歌

所が毘菴雜記以下五種は、已に散佚したか、余の寡聞なる未だ見ることを得ない、因て是は他日の搜訪に譲ることにして、今はたゞ余が豫て拾輯せる遺文と、先年購ひ得た前記著述目中の「息游先生事狀」一卷、及び舊書堂遺書中の「毘菴先生歌文卷」一卷、「追善の連歌」一卷とを併せて此處に收むる事にした。尙新獲の「春のことば」一卷も同じく收むる筈であつたが、是は故あつて登載する事を見合せた、誠に遺憾であるが致し方はない、併し此の殘稿で未見書の幾分を補ひ得る事と思ふ、因に本文中括弧を施せるものは、凡て編者の附註である、

昭和十六年九月

後學 吉田 銳 雄 識

登菴先生遺稿目錄

○遺文七篇

喪祭私說自叙

道澄寺鐘銘跋

書石菴先生緩步帖後

名二子說

題雪山老人書

泉冶醉筆墨菊贊

息游先生事狀

○遺詩十九篇

和韋蘇州幽居八首

冬夜偶成二首

夜宴左氏莊

重題鄭氏東亭

次韻曙菴和上

送山生歸京

岐蘇道中憶曾遊

冬夜卽事

聽笛

詠竹

己巳之春登箕面取道池田投宿荒生家因作

○登菴先生歌文卷

程明道の詩

禮驕儉客の別

武藏國孝子圖記の序

二境の説

富永芳春を弔ふ文

道風石摺和歌の序

其他短文歌文稿十數篇

○追善之連歌

○附錄

加藤竹里作髯菴先生を悼み奉りて

整菴先生遺稿

吉田銳雄拾輯

六

遺文七篇

喪祭私說自叙

余自幼賦性粗豪。甫將成童。吾祖好生君。辭龍藩祿。挈家遊於大阪。乃命余出爲人後。遂得曳裾於豫藩。於是東西馳騁。志愈豪。氣愈粗。既而不諧還。則好生君捐館。家益貧困。時余方弱冠。先考教導懇至。責以志學。乃折節讀書。始師事萬年三宅先生。無幾。先考移家播之赤穗。於是又從游熊陽藤江氏於龍野。乃擔簦負簞。來往于攝播之間者。殆十年焉。日聽孝弟之訓。徃過舊非。聳然感悔。欲改之未能也。歲庚子七月。自大阪歸。觀家庭。居厖一句。先考俄爾逝矣。嗚噓生之養。死之喪。既葬之祭。其孝子所以日孳孳歟。余也。遇家多艱。奔走四方。眇然索居。不能晨昏承歡於膝下矣。則其所以養者。竟不可得焉。唯執喪助祭。可以追孝於冥冥之中耳。哀哉。乃忘僭踰。據朱子家禮。丘氏儀節。併攷我邦諸儒之書。參互斟酌。間以家庭舊儀。與所聞於師友。輯爲一卷。名曰喪祭私

說其儀之略。文之疎。雖無可取。而本實則或存焉。何謂本。倫理是也。何謂實。愛敬是也。本實存焉。至於遵守之篤。履行之久。則夫禮也。亦或不外於斯矣。書成貽之宗家。其意無他。庶吾從子輩。長成之日。得覩此書。乃知吾家有古禮可行者。而敬依崇奉。以致孝於祖先。併以佑余追念焉。是不獨余之志。抑亦先考遺意云。享保六年辛丑春二月中井誠之叙。

道澄寺鐘銘跋

芳野西北三里許有榮山寺。其鐘原山城國深艸里道澄寺物。有故往此久矣。相傳銘小野道風書。延享年間余友土橋良慶者嘗遊於寺。偶見大奇之。欲傳人間。卽謀諸僧。僧乃印一本以貽之。然字皆左翻。點畫不完。於是三宅正誼與良慶及一二友生重如寺。懇僧請改摸。強而後可。乃踐架攀鐘。倣打碑法。得一本而還。復視諸初本。參伍校定。刻于石云。實寬延二年己巳之歲也。龍埜中井誠之識。

書石菴先生緩步帖後

八

緩步之帖。先師親蹟。散在諸家者。與誠之之所韜收。次男積德咸探輯雙鉤。以筆填墨。裱爲摺本。比諸唐樣打碑。亦不甚殊。卷末櫛詠一首者。誠之弱冠時。命齋以自立。先生偶來。飲齋小醉。笑引机邊書帙。題詠以賜焉。白鬚酡顏。和氣可掬。語韻風丰。宛在耳目。屈指數之。實四十年前事。人去而帙存。不堪悽愴之情。遂記授兒云。寶曆癸酉正月十八日。

〔右收于緩步帖〕

名二子說

孟生名以善。季生名以德。旣行冠儀。請字。予曰。汝知夫海與山耶。山積土以成。山海積水以成。海人積善與德以成人。善德之外。吾又何言。遂字以孟善季德。善耶德耶。積焉耳。勉旃。

（題雪山老人書）

岐港雪山老人所書五言二句。（前村深雪裡。昨夜一枝開）金谷柳氏之藏也。戊辰之夏。携到一觀。高古飄逸。倏生神仙之思。家偶畜薩杉。乃使奴造匣納還。亦昭愛重云。登菴誠之題。

〔右二篇收于懷德堂遺物反古帖〕

泉治醉筆墨菊贊

墨菊一幅。泉治者所畫。治時飲一斗。口囁嚅不能言。足蹠跟不能行。而運掌構之。能存象形一奇也。今也則亡。廼不忍蠹殘。糊繕而誌想。戊戌孟春望夜事也。（享保三年）甲子正月。瑩菴書。（延享元年）

〔右幅懷德堂所藏〕

息游先生事狀

先生。姓熊澤。名伯繼。稱二郎。八幼稱左七郎。中稱助右衛門。別號了介。晚號息游。嘗結第備之蕃山。門人呼曰蕃山先生。原姓野尻。父藤兵衛。爲加藤左馬頭臣。後仕山崎甲斐守。棄官居京。生先生於五條坊。時元和五年也。母熊澤氏。喜三郎某之女。喜三郎父平三郎。俱尾之瀬邊人。其先仕織田信長。初居熊野。後從關東澤邑。併兩地名以氏焉。至平三郎。奉仕權現大君。大君與信玄戰御方原。平三郎死之。喜三郎落魄在京。稱助右衛門。後改半左衛門。無嗣。以先生其外孫。取爲子。先生因冒母姓云。寬永三年。喜三郎仕水戶侯。先生從焉。時甫八歲。十一年。先生十六歲。以板倉內膳侯薦。始仕岡山侯。侯器重其材。恩寵

最渥。中山某問侯。熊澤豎子何更見異。侯曰。彼自侍子側。儀容嚴肅。未見懈怠。爲異他童耳。先生二十一歲。是歲嶋原賊起。隣國侯伯多發兵。爲官師助其軍勢。侯亦欲發兵。先生在選中。未發。賊敗。侯遂欲大用之。先生謂士而無學。不可有爲。會聞藤樹先生倡道江州。慨然辭官往學。義父及本親姉妹。仰哺先生者十餘口。以故貧困太苦。先生嗟嘆太甚。亦不以此改其志也。正保二年。先生二十七歲。再仕岡山侯。改稱二郎八。侯大信其學。所言輒聽。祿三千石。累遷從政。國政振革。隣郡屬望。國老長臣多害之久。之國安民悅。始皆信服。侯設諫匣。以求忠言。又興學校。一循泮宮制。使中井彌三郎及先生子右七郎。弟八右衛門掌焉。別置藝師。講禮樂射騎。教諸幼子。倣小學之法。數歲風俗一變。士反樸質。民歸孝弟。藤井懶齋撰孝子傳。今世孝子十有三人。而出備州者爲六人。歎曰。豈非以先生故耶。承應甲午備之中前大旱有水。民大饑。向死者凡九萬人。侯與諸長臣患之。先生建議。謂緩議經日。恐民悉死。急開數倉。渾施均救。民因蘇息。人或謗言。妄耗國財。而先生耳如不聞也。慶安二年。先生三十一歲。從侯往江戶。列侯縉紳。敬慕師事者。十有八人。名因大振。大猷。大君。欲召問道。未有命。薨。先生又還備前。時侯大張儒教。惡浮屠奢靡惑人壞俗。

諸吏承風。專爲排擊。至割佛像。毀寺刹。肉僧髮尼。所爲出制。外先生乃謂事若此。勢不可反。始有退心。適出遊山間。誤墜崖側。微傷手脚。乃告休見志。侯知不可強留。又意欲絆之。使其庶子襲先生祿。如爲後者。時明曆二年。而先生三十九歲也。乃去適京。改號了介。居可四五年。縉紳衣纓從遊者十數人。有人告所司代言了介浪人多接公卿。恐事有異。先生乃屏居城之鹿脊山。寬文七年。先生五十一歲。酒井板倉二侯使人傳意。勸先生遷明石城。主日向侯素信先生。爲結廬太山寺傍。先生名其軒曰息游。延寶七年。先生六十一歲。日向侯移封郡山。先生從行。居矢田山。無幾。侯又移總之古河。本多下野侯代至郡山。待遇先生一如日向侯。貞享四年。先生六十九歲。有書數千言。論當世要務。時巡見使經矢田山。訪先生廬。因見此書。大悅。乃請持還。出視執政。傳上府朝。而事意有忤。乃命日向侯配置古河。宥議許携妻孥。元祿四年八月十七。病卒古河。享年七十有六。葬大堤鮭延寺後。先生娶矢部氏。四男八女。長右七郎。以蕃山爲氏。仕岡山侯。早夭。次左七郎。野尻爲氏。仕日向侯。次竹三郎。仕下野侯。次左內仕日向侯。女皆適人。先生爲人溫雅恭敬。坐不倚。食不語。喜怒未嘗見色。治家以嚴整。施人以慈惠。有窮族貧故。來吐情。則痛戚憂苦。隨

分而調贍。或疑燕居無事。其爲閒寂。先生曰。吾欲爲善。日且不足。何間暇之有。曰。今日爲善。其跡何處。曰。凡人苟立心於義。則盥嗽梳縱。亦皆爲善也。不爾。縱至有大事業。匡合諸侯。自有厭閑地耳。居京學筦。一日奏越天樂。伶人安部飛驒。傍聽之。不知其爲先生。曰。美哉。嚴嚴乎。直而不絞。非正人孰能之。押小路源公學先生者。嘗有一生語及先生之學。公曰。生所以知了介。不過讀其書。以想其人耳。書曷盡。人余嘗左右親炙。愛敬溢貌。使人心醉。無容一言恨生不及見也。先生在明石。廬近太山寺。僧素聞備侯佛法之禁。舉出先生。常畜忿恨。至是欲一中之。及其相見。愛禮交到。大出意表。乃曰。曷有是好人。寇吾門乎。先生家兒往來寺林。持竿黏鳥。僧輩以先生故。不復呵禁。先生一日欲饗寺僧。陳物張具。身親點檢。務要潔清。已而曰。縑流素惡腥氣。吾家器皿恐帶舊臭。乃急買新好者。以畢賓禮。其咄動人。忠盡已。大率如此。當彊壯時。形體肥滿。殆妨起臥。乃謂兜鍪之人。不能上馬。若此可乎。自是食斥膏脂。寢徹被蓐。每夕跣足行庭。舞木刀。習擊刺。久之。竟致疲瘦。乃止。初自謁藤樹先生。聞道四十餘年于茲。不事浮文。唯經義之資。精思實體。日新月熟。所造詣者益深矣。所居都邑。門人競進。上自公侯大人。至士庶僕婢之細。一聽其說者。方知道學

之貴。心知之明。皆有由己。而不復求乎外。未嘗不感悔憤起。虛僞以往。實信以歸也。兼崇朱子。其心術議論。據以爲說。不爲不多。與之王學喜關紫陽者。大異。識者曰。藤樹似濂溪。息游似伊川。所著書。有集義和書。并外書。大學。中庸。論語。小解。二十四孝評。三輪物語。夜會記。三社託宣解。神道大義。繫辭傳解。易解。五倫書。大學或問。孝經解。并或問。女子訓。皆行于世。享保癸卯六月二十八日中井誠之撰。

〔右懷德堂藏〕

遺詩十九篇

和韋蘇州幽居

庶民產業異。亦同衣食營。我無官仕絆。隨意頤性情。堂淨客不到。茶鼎琴音生。風竹淡烟動。簷鐸歇還鳴。時引巖穴侶。擔厨野橋行。身世甘樗櫟。不問緩章榮。

其二

愧我衣食給。不解農桑營。五畝宅蠲稅。衡門鎖古情。窓明宜繡卷。性懶帙塵生。清晝客談熟。飲久夜柝鳴。春秋懷京洛。一葦兩回行人間。樂事足。無禍是吾榮。

其三

百年承平地。豪華事經營。吾廬蓬華底。徑深占風情。葡萄枯如柴。不覺綠芽生。簷雀乳幾日。今朝率兒鳴。東隣富屋在。喪子哭且行。貧家幸安健。花竹亦成榮。

其四

簑笠雖不着。心似樵漁營。運水灌藥園。討方修病情。青雲非吾事。白髮了此生。臨帖風吹紙。掃軒墜葉鳴。世波欽舟楫。路難賴杖行。觸興謾題詠。笑爲筆硯榮。

其五

本依鵲巢住。莫復拮据營。門外車馬少。庭中丘壑情。種松防濕犯。洗竹利筍生。春寺聽古樂。塵耳雅音鳴。放魚倚池檻。巨細亂萍行。每會鍾王客。聊擬翰墨榮。

其 六

居深塵不到。學堂樂經營。群童競呶呶。眞率慰老情。午窓松影動。新井石苔生。花竹翳鬱處。夕陽棲雀鳴。投餌觀魚躍。引蠅駐蟻行。無能乃身福。修拙謝時榮。

其 七

長鬚老赤腳。喜給晨昏營。慎守冰霜節。庶幾古人情。石爐靜蘊火。燈華墜復生。業甘呻佔畢。不問以文鳴。悔昔趨官路。風霜勞夜行。遣憂詩與酒。不關辱兼榮。

其 八

欽。幽風七月。夜聽紡績營。室家琴瑟意。兄弟壩箎情。自愛偃蹇趣。詩興絕復生。出門羈鞍客。憐隨征馬鳴。(原本脫第九
第十兩句)心安魚鹽市。休說廊廟榮。

冬夜偶成二首

覲疾留三月。始甘故國心。火爐吹藥霽。風雪試衣衾。稚子陪展畫。山妻扶整簪。達榮多遠宦。拙退樂身深。

暫僑故人宅。聊成新主心。護親時問藥。留客夜移衾。楮服味招隱。竹扃稀蓋簪。家僮頻趨市。苔徑葉常深。

夜宴左氏莊

風簷銀燭動。月席畫屏張。琴罷聽山瀑。杯飛舞野堂。裁詩憂韻險。練字愛鬚長。坐客都知己。利名欲兩忘。

重題鄭氏東亭

東亭西日微。風幌動殘暉。拂石苔承座。撫松葉落衣。野牛望屋駛。栖鶴認雲歸。此去還城市。山情旦夕飛。

次韻曙菴和上

地占帝王蹟。梵深花木中。笑斟彭澤酒。喜問虎溪風。聽鳥眞性定。尋梅仙路究。冕簪非我願。隨逐道心濃。

送山生歸京

革岸門前綠。天邊一葦回。梅花多此地。雪棹好重來。

岐蘇道中憶曾遊

連轡相飲處。落日酒旗寒。誰識白雲裡。獨攀危棧難。

冬夜卽事

酒渴夜思橘。探筐瓜軟金。朱唇含赤玉。仙液繞煩心。

聽笛

隣笛聲悲壯。對燈淚滿巾。曲罷稀語笑。恐有別離人。

〔右十七首收于荒木李溪大東昭代詩紀〕

○

病起喜觀竹。竹繁梅雨時。永高新綠濕。知是雨前兒。

余書素拙。且老病兩攻。無意操毫久矣。偶有寄三張楮於又叟。憑請者。乃肆一張。試題舊詠竹五絕。果然太醜。以叟余故交。不可以辭也。乃命男善德代書其二。以掩余劣云。仲春之望。登菴書。

〔右懷德堂所藏登菴先生詠竹詩幅〕

己巳之春。登箕面取道池田。投宿荒生家。生從游富春山人。山人今也亡矣。余欲通刺不果。於是不能無感。因作。

（編者曰：荒生指荒木蘭皋。富春山人即田中桐江。）

應頂山南吳社東。尋花觀瀑臥廬中。鹿門舊宅唯春草。龍鳳相逢問古風。

〔右詩稿高野辰之氏藏〕

登菴先生歌文卷

（程明道の詩）

閑來無事不從容。睡覺東窓日已紅。萬物靜觀皆自得。四時佳興與人同。道通天地有形外。思入風雲變體中。富貴不淫貧賤樂。男兒到此是英雄。

この程明道の詩は、宋のよの風なれば、理窟にもわたり、經書文字もあれば、詩を事とするかきりは、大やう棄て土のことくすなれと、本より大徳あり、風韻ある人の此道をたのしめるあらましを、おのつからなる言葉につゝり、韻を押し調をかなへたるなれば、吟することに餘意をさとり、なかむるたひに新味を覺へて、誠に手の舞あしのふむことをしらすなんある、かの事とするあたりの徳もなく、韻もあらさるか、これなん古風なり唐詩なりとて、數あまたになひ出したる其文字はめづらかに、其ことは、故ありけなるも、なにとやらんとかくしくせはしけにて、一二首はよむへし、十首以上はよむへからず、今この八句を解て耳ちかくせよと求むる人あり、こゝろみにおし

はかりていはゝ

○いとまありけなる折からは、何事として心のとやかならぬこともなきあまりに、

○いねむりをすこして、うちおとろけは、ひかしおもてのさうしに、朝日ほのくくとさしのほりたる先こそおもしろけれ、

○かゝる折ふし、心靜かにこのよの中をなかむるに、天地山川人間鳥獸艸木より凡天下の貨財器械にいたるまで、皆おのれくうまれつき、其ほとくを盡して、覆てあまさす、載てたはます、とまりうこかぬ、なかれてやまぬ、飛ふものわしるもの、花のひらく葉の落る、智ある人にはつはさなく、角あるものには牙なく、かれはこれをたすけ、これはかれをやしなひ、たかきもいやしきをあなとらす、よはきもつよきをうらやます、多くありまゝにて、やすらかにおちつきたるありさまか、まなこにうつり心にとまりて、ゑもいひかたう慰みとなるに、

○また春なつ秋冬のいみしきなめなとおもひあはするに、人間のはたらきにことなるなし、人のするわざにも、のへてはしむるは春ならずや、ことしけくさかりなるは夏ならずや、ひきしめておさめ、いためてとづるは秋冬ならずや、のへてかため、かためてのべて、人の盡ることなし、一日も一月も、一年も百年もたゝかくのことくにしてやむことなし。

○されはこの一すちの道理は、いつかたにかよひとゝまるものそとうち見れは、あめつちのうちにありとあるものゝ、けしきかたちをはなれて、おもなく香もなき所までも、ゆきわたりてあるやうなれば、はてしもなき妙用かな。

○さるにても妙用のあらはれて、かたちに見ゆるかたを見はやとて、おもひめくらせは、其心かあまつ空にのぼりて、かのなりもやうのめに見ゆる風の雲のといふあたりへいりこむ、さらはとてよく見れは、いろ／＼さま／＼にうつりかはりて、動靜はしなく、變化きはまりなく、中々ことはにももの

へられずあはれなり。

○この妙用の本源は天なり、この天よりうまれ出たる人間のかたちへは、たゞちに天地の正氣をたゞみこめたるものなれば、天人の正氣相感して、たれもくこのたのしみをしるべきものなれとも、人の形體に情欲あり、人に境界に苦樂あり、樂なれば心うかれ、苦なれば氣かしけ、情欲あれば心氣ひきたてられて、このたのしみを求むるいとまなし、然るに今人ありて、かうやうのたのしみをたのしめは、富貴の樂に居ても、禮をこのみて、心なかれず、貧賤の苦にゐても、命をたて、心うき事なし。

○おのこたらんもの、この場處にいたらは、はしめて豪傑のすくれものと名にたつへしとなり。
(元文三年) 戊午きさらきすゑの三日。

(禮驕儉客の別)

禮驕儉客似て非なるものなり、とめる人の禮は、人のましらひよからしめむ

と、尊卑上下の品々おもひわたして、誠のかさりするなり、されは人よくうけひきて、事よくおこなはる、其志義にあり、たふとむべし、驕はおのれかとみを人にふるまひて、其名をおのれにあつめんとするなり、されは人其めくみをうけても、心ふくする事なし、其志利にある故なるへし、儉はおのれをへらして、人をまさむとす、吝は人をへらして、おのれをまさむとす、其驕禮の服不服にことなる事なし、驕吝ふたつよくく人に害あればにや、周公の才の美ありとも、おこりかつやふさかならしめは、其餘はみるにたらず、と夫子ものたまひけり。「やふさか翁ありけり、つとめて起て川にいて、手あらひ口すすき、家にいらんとしけるに、いとおほきやかなるおのこ、五升はかんの(齒釜)はかまさけもちて、これめせ二百なりといふ、やふさかおきなめとくみつて、ぬすみものこさめれ、人こぬひまに徳つけはやと、やをらおのか家にいりて、二百とりいて、かい得たり、むへなるかな、この翁かいゑのかまうちやふれて、百二百もておきなはしむることあまたゝひ、しりもりふさ

からず、あたらしきは數百なるへしとはゝかるころなり、うれしといたきて家にいりきて、家人にむかひ、家をおさむるつとめにあり、つとむれは徳あり、朝ねに損ありといましむること常なるを、なんちらうけひく事なく、老たるか口のくせなり、やつこの耳のやくにこらへてきけなど、おのかしゝいふ聲のきこへぬふしもあらねと、其しるし見せてこそ猶いましめむと、このあしきこらへおほせたり、今このしるし見よ、朝ねしてこの徳つかんや、といきまき打ほこるに、家人本より心ふくせすして、しのひにわらふめり、あやしとかまとのあたり見おこせたれば、朝戸あきたるを、ぬす人つけてみて、そか家のかまをぬきいたして、門のほとりにてはやくうりたるなりけり、やゝとさけへとゆきかたなし、家人ら年ころの耳のやくむくひ得たる心地やしけん、さはかりのおきなも面すこしはあからみけんか、釜はたゝもりにもりて、薪をやうるほすらん、いとおかしきや^(カ)さかたゝりなりけり。

(編者曰、右恐くは不問語の佚文なるべし)

（武藏の孝子圖記の序）

春の雨あらたにはれて、日かけのどかにてりわたれば、鳥啼花さき物みな光をあらそふ、鳴んとおもひて聲をととのへ、さかんと心さして色をたくめる、花とりにもあらず、あめつちの化にさそはれて、おのつからにしてやむことあたはさるへし、道しあるよの時に逢て、人君につかへ、親につかふるもの、大やうはまめやかに孝なり、名をもとめ幸をはかりてしかするにもあらず、ありかたきおほんめくみにひかれて、人皆よきかたにうこきもてゆくなるへし、されは今國つたみくさのあるか中に、孝をもてきこゆるかことさらにおほくなんある、むさしの國長五なるもの、其かすにかすまへられて、おほやけのたまものをゑたり、ふきの氏其圖記にひかりをくはへて、われに序つくれとすゝむ、世にたくひを錫ふて、久しく傳まほしとにやあるらん、其徳隣りをなして、よくまれあしくまれ、かきつくるやうになりたり、又みなや

むことをゑかたしといふへし、春にあふ花鳥の心しられて、いといみしきわ
さとそなれりける、孝なるかな時なるかな、かのとのとりの年神無月五日、娑
年遊記識

（二境の説）

人の境界に貧富のふたつあり、大やうとめるは心おこり、貧しきは心すらむ、
皆やまひなるべし、やまひをやまひとしらは、なとはやく薬を用ひていやさ
ゝる、薬とはなにもものぞや、かしこきかおしへをく言の葉なるべし、此治お
そくてはならぬ事あり、それをいかにといふに、とめるまつしき、相ともに
身あり家あり、身あれば心あり、心あれば欲あり、家あれば人あり、人あれ
は心々の異なる、それ／＼に交るの道あり、しかるを唯おのかまゝの欲にの
みひきたてられて、よろつ己かたためにのみ其金銀財寶を用ひて、人を人とも
せされは、世の人あるはそねみ、あるはうらやむ、そねめは害をなし、うら

やめはへつらふ、害をふせかんとて財をついやし、へつらふをうれしと見て、たからを用ひてひきたてんとするさま、いよくにくみいよくへつらひて、つゐに一己の勢をなし得て、驕の字のさまになりもてゆき、身ほろひ家やふる、貧しきは心ひかみ、へつらはしとするかきりは、よろつかとくしくちからをはるゆへ、人ににくまれ、世の中ののけものとなりて、人交りあしく、身せまり家たゝす、さらは今これをいかにせん、とめるは禮をこのみて、かの金銀財寶を人の交りについやし、おのれをつゝまやかにして人をすくへ、貧しきは身の分を守りて天命をたのしめ、心ひろくまろらかにして、人の和をうしないしと、世のさしつかへならんやうにとつとめよ、富るはとめるにまかせて、とみなりに身おさまり家齊り、あないみしよいかなとめる人とうけひかるへし、貧は貧なりに身おさまり家齊り、あななつかし事たられても世に求めなし、うれたき中によくたのしめりと、あるはとふとまれ、あるはあはれまれて、めてたき世をもへまし、そのしるし明らかならしめんとならば、

富るものゝ道しらぬあたりへゆきてみよかし、家居きらく、しう玉しきわたして、調度うるはしく、すき多かる中にも、夫婦目をそはめ、父子ものいひかちにて、下々いかめしくしたりかほならんは、みるく毛そひへてさむ^(紙破ニ)□^{係ル}やうにや有らん、貧しくても道しれらん家は、かるらかにひきくたてたる竹の門、むくらめくかきねも、いときよく塵をはらひ、夫婦相むかひて、ものいへるさまいとやすらかに、父子相たすけ、下々よやすけなるあたりは、なにとなうあたゝかけなり、禮運に膚革充盈は人の肥たるなり、父子あつく、兄弟むつまじきは家の肥たるといへるも、かうやうの心なるべしや。

(富永芳春を弔ふ文)

芳春のぬし去年身まかりたまふ、さねゆきはやうより師をともしして、このかみのことおもひかよはし、ぬしもまた弟のめくみをなんかけたり、學を勤めあやまちを正し、やまふをたすけ業をたてしむ、すめる家さへ軒むかひに

して、あしたゆふへ、人こされはわれゆく、ゆくにあるしまうけせず、きたるにまろうとかほなし、なへての交りならすといふへし、ぬしうまれなからにして風韻ありて、月花はさらなり、山にも川にもめとまる所つゐにわするゝことなし、志す處ゆかぬかたなく、ことさらに瀧をこのみて、津の國なるきの國なる、やまとかはちやましろ、みのおふみちなる、みなみる、さねゆきことしはりまの奥山に入りて、山川のめつらしきも、たきのいみしきも見たり、いまそかりてかたり出なは、うれしときゝて、おのれもけしきたちてうちほこりなんものを、かなしきかなや、いま人いつれのところぞ、琴をやふりいとをたゝんも心のこれは、そのあらましを記ろくして、其靈にそなへて祭りの詞にかへんとするなり、なき玉の光しあらはこのふみをてらして見そなはし玉へ。

誠之上

道風石摺和歌の序

難波津新清水清光院に卷物のふるきあり、色なる帛に歌そこはく首をかけり、小野の道風のなりといひつたふ、二王のすかたにかよひていと妙なるものなり、へにけん年もやをら千とせに近ければ、きぬやつれ、すみかすみ、文字のすかたもわきかたかりけらし、友人正よし、これをおしみ、同じこゝろの友とちにかすよし、かすのりらをさへにかたらひあはせ、かの院にまかり、すかしみあけ見、六人みたひかよひて、かろうしてうつしとりたるを、板にのほしぬ、己のとしはおなし君のかねのめいの眞なるを、世にとゝむ、ことしむまのとしの春、またこの草なるを家にのこしぬ、この道の風ふきつたふへきときぬと、人々よろこぶ、ひとりわなゝみかたからのみかは、そもく日の本のひかりなるへし、寛延かのへむまのとし卯月、誠之しるす。

老のもののわすれとて、去年とおほへしことも、かそへもて見れば、三とせ四とせになりぬ、花のころこそものにはまきるれ、青葉の山に初ほとゝきす、まちつけてなとかならずと契れる友もいまたきなくに、山はいろつき、庭はむしの聲しきりなり、村雨の空さへしくれめき、雲のたちもろうくしく、時しらぬあられなと打驚かす、かくてたゝうつりにうつり、すきにすきゆくめり、こはさてもいかにくといふほと、ひとひふたひとくれゆくめれば、ことしの冬も見るく盡て、こん春の事わさすへし、あなかしこ、こん春に同じくひすな。

老か日をみしかしといふをあやしけに、いはけなき世はきゝこしものを。

○九月十三夜おもふ事ありてよめる

ふるさとかへりしとしもとをあまり、みしよの空ににたる月かな

〔編者曰、右老の物忘れの文及び九月十三夜の歌、懷徳堂遺物「反古帖」にも出づ、而して其の終に「近作小文小詠録遺請正、さねゆき、かけのりのきみへ」とあり〕
(加藤景範)

(寛延二年カ)

○巳のとききさらき八日、母の忌日によめる。

はゝき木のありと見しよのおこたりは、なくての後のなみたなりけり。

おほえす古歌體になりたり、いつのころの風なるへしや。

(四字紙破ニ係ル)

□□□□のありとみしよのおこたりも、なくてそいとゝかなしかりける。

色に出んの五文字の心は、秋のゆく衛にこもりたれと、わすれめやに置かへよ、空の字もやすらかならねは、月のかけにあらためよとおしへ、か
 しこう承はりぬ、和歌の浦道にいりたゝぬ月を詠め出したるに、ほのかな
 るかけにはあれとゆくすゑの、秋の最中には、さしもひかりをみかきて、
 てりわたるらん、それを今三か月の、かすみそめたるみそめたる、おもへ
 は末遠きうれしさなり、たのもしさなり、其空もこの空もおなし空なめり、
 月もこの空をこそたのむらめ、人もこの月をこそたのめといふ心を、契の
 字にはふくみたり、所謂可解不可解の間にあるへし。

(上文缺)

かきりはかく心添ふへけんやと、いといみしうかたしけなきに、猶い

はしとしもさためかたき所あれば、まなひかてらにちんするなり、あなかしこ、あしかる心もてよしと名つけたらんを、打かへして、なには浦の浪さばかりとなおもひたまひそ、神書(カ)にたに二三の心こもれりといふに、三十一文字のうちになとわすめやのこゝろふくまさらんや、それうたはうたふなり、人の聲にあけて、ことはをなかく引たるを、打きく人の耳にゆらくといりきて、心にうつるものなり、常さまのことの葉の、其事はりたては、事のさますみゆくたくひにはあらさるへし、されはうれしかなしと打つけならんより、なにとなくきくらん人の心に、けにうれしけなり、かなしけなりとおほゆるかたになつかしき心あるへしや、この故に聲にあけて、うるはしくつらくときこへわたれば、其ことはり明らかならぬも、大やうはゆるすと見えたり、先この一首は空の一字や骨ならん、これをいかにといふに、初春の歌すむ人の人なからましかはのおしへ、つゝしみてうけ給はり、いひかへすへきことはなし、早春の意すくなしは猶ことはあるへし、春ふかく八重たちこ

めたらんかすみには、松たてる遠山みゆへけんや、みとりほのめくはうすくあさきかすみなり、うすくあさき、早春ならすして何ものそや、今よみかへて、

すむやたれ外面の松はかすめとも、のき端見えすく山本の里

見えすく如何、すき見なといふよりおもひよせたとおほつかなし、早春の意すくなくは、たゝ山霞などの題なるへし。

夜やいねしを夢やみしにあらためよとの事、誠にやいねし、むつかしきことはなれと、下の句一とをりの秋にたに、ねられぬ聲なるに、ましておもひあるこの秋そ、萩の上風も心せよ、さりとしてはことほりしらぬとふかくうらみかこちたれは、上の句にかくむつかしくちからをいれたり、ゆめやみし、やすらかなれと、下の句のつり合ひ如何あらん、またてやは山ほとゝきすは、もの字村雨をとりはつしたらんには、定めかたきのとかめもあらんか、ほとゝきすは待ものにしたる本よりなるに、こよひのは別而まちつけて今一聲き

かてかなはぬことあり、本より一聲なるかしかも遠く、しかも村雨のふりま
かふ聲なりとなり、如何。

いつそやよみ損したる民のあさゆふつくりかへて、花にあけ月にまちいつる
外もなし、おさまれる世の民のあさゆふ。

雨をきゝてよめる

花にみんなめくみをおもふのとけさよ、しづかなるよの春雨のころ

○

貞享のこよみなゝそちあまりの程へて、しはくたかひもてきぬとて、寶曆
にあらためさせたまふて、あめか下にわかたせたまふをみれば、きのとのゐ
の八月十五日月そく六分、とりの五こく東北にかけそめ、いぬの四こく北に
甚しう、いの四こく西北におはるとしるせり、こそそのけふも食しけれと、雨
くらかりければ、見し人なし、ことしはたかひたかはすこゝろみんとて、名
たゝる空はもとよりにして、人々たちいてゝ見るに、露たかふ事なし、この

道のはかせたち、いま者心おちゐて、ほこりにさけたうへたのしむらめ、と相たはむれて、扱ふる里にても同じ心にまちいつらんとおもふより、そろになつかしうおほへて、よめりける。

ふる里の山のあたりにゆく月の、空なつかしみ夜やふけぬらん
なかめいてゝいまや待らし月のゆく、雲のそなたのにしの海つら
人もみな月のうちなるこよひそと、おもへはいともかけの身にしむ

佐年ゆき

○

むかしうつし植たる紅梅のおほきなる、いと老まさりたる十とせはかりの
年月にやせおとへて、根もと大かたにおちさり、半はゝた、皮はかりにな
りたれば、ことしは花もつけしとおもひたるに、春のはしめつかた、南の
まよりなかめ出したれば、あかき花枝ことにひらきて、いまでも猶春しり
かほなればよめりける。

老か身の心のいろなうつろひぞ、くちはつる梅の花を見るにも

○

吾母なる慈敬の君、九十一にて身まかりたまふ、世にめつらしといひわたり、人の子のうらやみくさにもしけり、おのれもけにたりぬとおもひしに、ことし溝江かの家の大婆きみ、九十六の賀しけり、耳め起居をきるまで、むかしにかはらて、なれし人のもとよりきこふるに、なとやらんうらやましう俄に事たらぬ心地して、打なみたくるに、ものうしと見てし年よりことしひつしの春までをかそえもてくるに、七とせなりければよめる、

百とせとなにいのりけん七年の、けふかそえてもみつのたらぬに、

小雨のふりけるに、庭の梅をおりてたてまつるとてよめる

打梅の露もなつかし春の雨、いさめし親のめくみおほえて
誠之上

〔以上「整菴先生歌文卷」に收む〕

たそかれころに、ゆふかほのはなををくりけるひとのもとへもうしつかは

しける、

そのそののしろきはなのなとはてしも、ゆふくれころのひかりにそしる

さねゆき

〔右一首書堂先哲合裝幅に載す、編者所藏〕

追善之連歌

延享二年三月始同六月終

ものうかる身やうくひすの春の友

誠之（髡菴）

かなしみなかき日を送る宿

盈枝（吉田氏、懷德堂五同志之一人）

陰久にしめし老木の花くちて

同

馴つる野邊に残る通路

誠之

旅に來てかへりみやこの夢心

同

つかれいかふかしく草枕

盈枝

いとまなき蛸も夕は月を愛て

と絶かちな衣うつ音

秋風の荒ましくふく浅茅生に

立所たつねて鹿の鳴らし

爰かしこ薩男かせむる山の奥

科を遁れて住菴やたれ

世に遠きさか野の寺のかたはらに

御幸のあとの道はなつかし

小車を忍ひていつちやりぬらむ

うしや待わか聲のまかへる

松風の戸さしをたゞく宵々に

文にしたしむ秋のともし火

たらちねの教に八露をこたらて

誠 盈

之 枝 同 之 枝 之 枝 之 枝 之 枝 之 枝 之 枝

家□月日の影とさかゆく

天地はよきにさちある道なれや

筋なき願ひ神もうけしな

二
墨吉の戀わすれ貝拾はなん

なにはにつけて人もうらめし

あらましの山にし急く心しれ

花にさくらの傳まつそうき

たれこめて雨の音きく春の夜に

彌生の果をとへほとゝきす

夏衣きのふにかはる朝ほらけ

日毎に雲も暑くなる空

越來つる峯より外のみね見えて

あやうくも又わたる棧

枝 之 枝 之 枝 之 枝 之 枝 之 同 之 同 四〇

むすひも果す消る糸ゆふ

冴返る野邊の叢もえかねて

雪にかすまぬ不二の芝山

晨明は入てもそことみほの浦

磯うつ浪のをとはすさまじ

三

なかき夜のうきは苦屋のかり枕

いも安からてわひしさすらへ

なかめしや心つくしの空ならん

めのとをのみそ頼めつる人

おもひかね又やるふみを手に持て

こりすまに檜たつる錦木

末遠したとるか戀のみちのおく

憂事しのふ山に入るらし

枝 之 枝 之 枝 之 枝 之 枝 之 枝 之 四三

松にをとする嵐舞しも

馴來つる春もむなしき花の跡

衣の色のうらゝならさる

誠之 五十

盈枝 五十

附 録

登菴先生をいたみ奉りて

あしひきの山へをさして、みな月の、日影とともに夕やみと、かくれますこそ
悲しけれ、あはれしのふるいにしへは、岩間の水のはやくより、くしのとほそ
をたゝきつゝ、いわたる道に人をさへ、いさなはゝやとあさゆふに、をしへ
さとしてくるかみの、白かみまでにたゆみなき、めくみをうくる數にまた、
はくゝまれきて君かへん、なゝそち八十年もゝちをも、かそへんものとたの

みしも、今はむなしくなりにけり、さためなきよをうつせみの、ねにのみな
けは秋ならぬ、それでも露けくふゆならぬ、こゝろも雪とけぬへくおもほゆ、
(加藤竹里)
景範つゝしみて奉る。

○追 加

本編の印刷略ば成りたる後、京都の中井黄裳先生より左記遺文を拾輯して寄せられたから、茲に
追加として急ぎ登載することにした、鋭雄記す、

目 次

揖保のなごりの巻のおくがき

夢 の 記

廿三夜まち

和歌 九首

詩 五 首

手札 一篇

揖保のなこりの巻のおくかき

ありと見しは、木々の世をかぞふれば、十といひつゝ三つやへにけん、はりまがたいほの湊に年浪をかさねて、もゝとせにこゝのつたらで身まかりたまふ其ほどの年月、さねゆきがすめる難波の里におくりたまふけるふみのかずくくりかへせば、おほやう人のよしあしにはことばの露のかゝる事なうて、いほのとまりにゆく年はとまらず、雪はこのめる物から、ふるやの窓のながめ興あり、なには津の冬ごもりいかにすめる、あら玉の春の光こそ、あらたなれ、名だゝる梅はさきつや、こなこの花も時しりがほなり、みな月のあかつき夏やせすらん、初秋風になおかされそといましめ、さいつころのかへり見こそさうくしけれ、又いつかかへりくめるなど、すべて折にふれ、事にのぞみて、ながくしう、うつくしう、かきくづさせたまふおほんふみどもの、車にもせつべうおほかるを櫃ふおさめて、おほんかたみに見奉らんとすなるを、其すき間より虫のはひ出たるをいぶかり、ひらきみれば、す

べてみなしみのすみ家となれりける。紙のあたらしきつよかるえらみ出し、
よひくやはらかなるほそなりにきりて、紙繩につくりて、母しろの君に奉
らんとす。さておもふに、十とせがほどのこのかた、したしきうとき、うせ
たる人、いくそばくぞ、むつかしくもつれたる事のいでくめる、いくたびぞ、
いまいろかしはうしと恨み、くるしとかなしみ給ふらん。むべ世におひさぬ
事よとおもひ、又おもひの外のさちある時は、きこえあげて、その歡をうけ
引てとおもふ心もいできて、ものゝかなしきにつけて、さるにても、心ひと
つによるこびかなしみのたちまちにいりかはる、あやしといふこゝろを歌に
つくりて、かのかみ繩にくはへて奉りける。

うき折はなきもましはといひすてゝうれしきは世にあらはとそおもふ
ひのとのうしのとしむ月廿日誠之記

此の一篇をふる文箱の中より見出でたれば、慈敬大姫の水莖の跡五ひらの残れるを昏繩によりた
まひたる残紙にやあらむと思ひければ、この二くさをとり合せて一卷となし、揖保のなごりとは

夢 記

文月の末のあつき夜なりけり。蚊をやらひ、こうしてふしたるに、はやう失たる弟わか家童子など相かたらひ、母をぐし奉りてものにまかると見し夢のうちに、ある人の家にやどりぬ。そが家いとひろらかにして、前栽に植わしたる松竹苔むし、みどりなめらかに塵すくなし。嶋このめるとおぼしく、水の心もとゝこほりなくまかせたり。花の木の間に樓みゆ。池の橋よりわたるべし。池のこなたにすみしめたる母屋あり、板じきみがきいれて、かゝみつべし。樓は野山はるかに見わたして、あけぼのゝながめよりなる。かうやうの景このませたまへば、夜床はこゝに奉りて、家童子女のわらはゝおんかたはらにはべらせてん、おのこらはしたやにふせて、とのもとせばや、われらふたりはもやにふして、ねてのあさけはおちかたにぐし奉らんと相はかると見て、やをら打さめぬ。ゆめとしりせばさめざらましの言の葉ことわりせ

めてせんかたなき。夢はうつゝのひゝきなり、うつゝは夢の形あるものなり、鐘のかたちをうてばひゞきつたふるがごとし。晝つかたなにはの事にわたりて、よしあしにおもひをよするは心なり、こゝろのひゝきこゝろばせなり、こゝろばせ心にすがりて、よるあらはるゝがゆめなるべし。されば夢をうつゝにあてゝ誠とするはまどひなり、おろかなりといふべし、うつゝをゆめと見なすはみだりなり。人のわざなほざりにして道に害あるべし。かのかしこきはうつゝを正しくつとめて、ゆめにまどひなし。このことわりさとらずしもはなけれど、などやらん、面かげまなこにとゞまり、いねも得せで、つやゝおもひかへして、よめりける。さはかのおろかなるがたぐひなるべし。

はゝ木々につらなれる枝のありと見てわたりもはてぬゆめのうきはし
八月はしめしるす 誠之

廿三夜まち

誠 之

廿三夜まちとて、あかつきちかき月まちみる事は、おろかしきをんなわら

はべの身のさちいのり、ほどきのひかりをがむなどやうのあさましきわざな
めり、と年ごろあざ見おもひしは、みなおし□んのひがみ心也けり。ことし
ひのとの丑のとし長月の其夜なりけり、さよふけて起いでたりしに、しぐれ
めきし此ほどの空、つゝがなくをさまり、人音いたらぬのきばに、おのがま
しうたちのびたるなよ竹の葉のさら／＼と聲するあたり、かたわれ月のきら
／＼とさしのぼりたる、きとかほ見あはせて、ものいふべく、さしむかひた
り。かうやうの夜をしも、むかしたれ、心ある人の見出して、月はまろらか
にみちふくれたらん興なし、やせてなゝめならん、見所おほしといひけんを
きゝつたへ、かたりつぎて、此夜半の名だてにしけんとぞおもふ。ね所にい
りても、猶心のこりせられて、つや／＼打もねずして、よめりける。

秋の名ののこれるかけもはつかあまりみよとや月の空にくまなき

こん秋もこの夜半をわすれじと、心に契りて二十さやを句のかみにすえて、
にしきたのしくれの雲を打越てさしいる月のやとそえならぬ

おほうちやまのあかきにはに、むらさきのそてのうちはへたらむかすみかせきにたちつとひたらんむまくらみなこれきみとおみとたゝしきくにつかせのふきつたへたるいみしさなど、このあかつきおもひあはせてよめりける、

あまつほしきたにむかひてあくるよのそらのつらなるまつのした賀勢としのをのへいかゝあらんやといふひとありしはるかむかしのことにてわすれたり、はゝからのいへにとゝまりてはるのわさなともよほしたつるにつけて、さるにてもいとはやくすきにけるとしかなとうちなけかるゝゆふくれに、かねのおときゝてよめるなり、このこゝろみやことなければ、としのをのへのつみゆるすへしやといふもありけり、はるあきにをしむゆふへのたくひかはとしのをのへのいりあひのかねうまこのかうむりしたるいへのおほはのなゝそちの賀しけるにまかりつらなりてよめりける

むらさきのはつもとゆひのなかきよをゆかりのひ□とかけてみてまし
やよひもちのゆふへ川嶋にまかるとて家童子かすよしつれゐて舟にの
る、月ことさらにあかうてねられぬまゝ、とまをおしひらきてなかも
出したれば、山崎の山つゝき山さくら咲たるに月きよらなり、
ところ／＼花あらはるゝ山の端に月おちかゝるはるの明ほの

承久の記傳をよみて

ひかりなきよやさていかにさとのあまのちりにましはるかみのみうまこ
あきのうたのうちに

おくつゆもあやしきまでのたもとかなもとよりあきのゆふへなからに

山家雪

ゆきをみてすむやましはのをりふしはとへかしとよにまつのしたいほ

山家梅

世にしらぬ香こそ身にしめ遁れ住ひとりのための梅の春風

題しらす

このあきはいかにほさましかねてよりおもひしほかのそでのゆふつゆ

乙丑之冬。願痾天心軒。軒乃隣花院後小齋。院在正法山北門內第一區。出門則龍安等持御室雙岡諸勝參差羅列。不過數里。皆可歷涉。遇天晴心爽則一奚數侶。引杖徜徉。至是病襟洒然。步履有加。歸坐天心則香爐茶鼎一室閒如。門犬眠庭。禽啼不速客。客自到。不尋梅梅自開。直吾神仙窟也。忽憶宋鷓鴣野奉眞宗詩曰。達人輕祿位。居處傍林泉。洗硯魚吞墨。煮茶鶴避煙。閒惟歌聖代。老不恨流年。靜思問來者。還應我最偏。乃援毫揮寫。以哦以娛。遂依韻述懷。其詩曰。

性愚無用世。僻地自林泉。點易風翻底。移篁葉亂煙。明時須討樂。白髮不論年。通塞甘天命。吟巾轉將偏。

三輪先生將東歸。茲併宴社中。五七長老謹述尙齒意。兼奉餞。

群仙朗嘯繞橋來。饗下喜迎絳帳開。清世露繁君子國。春林烟鎖帝王臺。鶴齡鷗意隨磯

石銀鬢玉牙炤琥杯。寄語函關東顧老。桃源此在賦歸哉。享保癸丑孟春之望、中井誠之拜題
乙亥季春同社友遊桂川。時天和融。占自適趣。一人有詩。依其韻述懷。
桂流遶處物皆清。況是春山花有情。鶯囀樵歌眞樂事。不須瓊殿管絃聲。

伏水懷古

諸侯爭朝霸王年。叱咤動擔天日邊。欲問槩橋金井跡。桃花深處野人眠。

失題

盃嗽對風竹。意如乘舞鸞。露梢珠未墜。新萼覺微寒。

昭和四年三月十七日美術俱樂部所見先哲手簡十餘卷中第八卷より

上略、且又弊校も經星霜及頽敗、自舊年よりく致し立、正月十七日手斧
始、當月十七日上棟、此節内造作甚取込申候、基礎根つよく仕り置候間、堪
永久可申かと本望に□□御座候、

三月廿七日

中井忠藏誠之（花押）

川田半太夫様

菴菴先生遺稿 終